
君の物語

ササキヤス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の物語

【Nコード】

N2770BA

【作者名】

ササキヤス

【あらすじ】

夢が夢じゃなくて魔女がロリでババアでマッチョはホモっぽくて、そんな異世界に召喚された少年が更に異世界から召喚したりする物語。

夢から夢へ（前書き）

初作品です。よろしくお願ひします。 1月9日、ご指摘を踏まえ
魔改造してみました。

夢から夢へ

「それじゃ、戸締りしとくんだよ」

「・・・ん。で、今度はいつ帰ってくるんだよ」

「さあね、一体いつになるのやら。　そろそろ泉も親離れた方がいいんじゃないの？」

「・・・っ！誰が親だ誰が！さっさと出て行け帰ってくるな！後死ね！」

「ハハハ、酷いなあ、もう。じゃ、いつてきます」

ガチャン、と大きな音を立てて閉まる鉄のドア。

「・・・いつてらしゃい、トウノ」

この重いドアの向こうにはきっと何も届かないことだろう。

俺は鍵を閉め、チェーンをかけ、居間に駆け込む。

何が親離れだ！

あのニヤけた顔を思い出すと無性に腹が立って、俺は手近にあるクッションを取り敢えず力任せに思いつきり殴った。

有名キャラクターの顔を形どったカラフルなクッションは無残に凹んでしまう。

「不細工だなー、お前。トウノにそっくりだ」

そう独りごちて一人には広すぎる居間を眺め回す。テーブルの上にはたくさんのメモが散らばっている。

『6月24日 トウノ、出張』 『トウノとは泉の養育者のこと』
『夜は早く寝ること』 『お風呂は長くて一時間、水分をしつかり取るように』

『クーラーの修理業者はトウノがいるときに呼ぶこと』 『忘れちゃいけないからメモは剥がさないで置くこと』

俺が忘れてしまわないために、トウノが毎回出かける前に書いていくメモ。俺にとってはとても大切な紙切れ。

時刻は午前10時。憎いくらい夏の空は晴れ渡っていて、最近危うげに稼働しているクーラーを俺は睨みつけた。

滅多に外に出ないから俺の肌は真っ白。灼熱の太陽がどれだけ猛威を奮ってしようと俺には関係ない。

俺はいつも通りの習慣を繰り返すだけなんだから。

10年モノの学習机は居間にある。トウノ曰く、いつでも顔が見れるようにするため。俺はそれに向かい合っていると、黄色の数学の参考書を開いた。微積分やら数列やら小難しいことがたくさん書いてある。世間の高校生はこんなことをやっているらしい。

この糞熱い中、仲良く寄り添ってご苦労様だなあ。

決して妬みでも嫉みでもなんでもない。自分に言い聞かすように俺は雑紙に計算を書き殴った。

ピピッ、ピピッ、ピピッ

時計がやかましく鳴っている。

これはお昼ごはんの時間を知らせる合図。

「・・・別にお腹空いてないし良いよね」

煩い保護者は今日はいないのだ。俺は眼の前の作業に没頭する。今やっているのはグラフに書いたレモンの面積の求め方。

いや、もちろんレモンなんかじゃないのは解っているけれど、どうせ無駄な知識だ。

どんな覚え方したって人に話すことなんて無いんだから。

丸くなって使い物にならなくなった鉛筆をゴリゴリと削り、俺は再びノートと向かい合う。

ピピッ、ピピッ、ピピッ

時計がまたやかましく鳴っている。

確か昼ごはんは今日はやめたんだった。だからこれは晩ご飯の合図。

6時間もやっていたのか。

そういえば、レモンの面積は卒業して今は池の面積を求めている。

流石にお腹が空いてきた俺は台所に向かった。

今日の晩ご飯は大量に余ってる大豆で出来た栄養機能食品。

トウノがいたらやれ味噌汁作れだの、コロッケ食べたいだの煩いけど、俺一人ならこんなので充分。

もそもそしたそれを牛乳で一気に流しこむ。

お気に入りのフレーバーはトマト。本当はトマト嫌いだけど、これはトマトの味がしないので中々に征服感があって良い。

物足りないのもう一本袋を開け咀嚼し始める。

音が無いのも何なので、テレビを点けると毎日やっている国営放送の『病気との付き合い方』という番組がやっていた。

白衣のおばさんがにこやかに視聴者に話しかけている。

「 氣の方が心細いということは注意しなければなりません。病状は人により様々とは言え、孤独感は病状を悪化させる原因にもなり得えます。

ですから、みなさん、なるべく傍にいて安心させるようにし
ブチッ。」

乱暴に電源をコンセントごと落とす。

何もこいつら解ってなくせに。誰も救っていないのに偉そうに。

気分が酷く悪い。空腹に突然飲んだり食べたりしたからなのか胃もキューキュー音を立てている。

どうしよう、お風呂にもう入っちゃおうか。

まだ湯を張ってはいないけれど、入りながらも出来るだろうし。何より今はすぐにでも狭い浴室に籠もりたい気分だ。

「よし、入ろうと決めたら入る、それが大事」

誰かに言い訳するように大きな声で言っつて、半分ほど食べて飽きた栄養機能食品をそのままに俺は浴室に小走りで向かった。

風呂から上がると時刻は9時を指していた。二時間ほど入っていたらしい。

冷蔵庫を開け、キンと冷えた麦茶をコップに注いで飲む。

喉が痛くなるほど冷たいそれは火照った身体には丁度いい。

これからどうしようか。

今日は習慣もすっかりこなしたし、持っているゲームも大体クリアしてしまっている。

どうせ起きていたってすることないし、もう寝ちゃおうか。

そう考えながら、俺は空になったコップに麦茶をもう一度注いで一息に飲み干す。

早寝早起きは三文の得だって言うし、寝るか。

俺は善は急げとばかりに駆け足で洗面所に向かい、身支度を整える。病院には行けないから、歯磨きは念入りに。今日はこっちの歯磨き粉を使おう。

トウノの趣味で10種類も備えてある歯磨き粉の中から一番高そうなものを選んで俺は歯を磨いた。

ゴリゴリと乱暴に擦りながら考える。

何か忘れていないだろうか。ごはんは食べたしお風呂も入った。うん、トウノのことも覚えている。日課の勉強もオーケー。あとは……

「あ」

ぼろり、と俺は歯ブラシを落としてしまった。ポタポタとだらしく落ちる白く濁った唾液。

慌ててティッシュで拭き取りうがいをする。

寝たら変な夢を見るのをすっかり忘れてた！

そうなのだ。最近俺は変な夢を毎日見続けている。そのせいで中々眠れない日が続いていることもすっかり忘れてしまっていた。

トウノに相談しようと思っていたのに！

昔、原因はわからないけれど寝られない日が続いたときに、トウノは知り合いの医者から睡眠薬を貰ってきてくれていた。それがあれば何となくだけどぐっすり寝られるような確信が俺にはあった。

しかしトウノはもう何処かへ出かけてしまっている。早くても3日、下手すればひと月以上も帰ってこないようなヤツだ。

「諦めるしか、ないか」

起きていてもつまらないのに寝ても辛いっていうのは結構応えるものがある。

少しだけ期待してベッドの横の携帯を見てもメールも着信もない。薄情なやつめ、そう毒づいても帰ってくるわけでもない。それにアイツに頼るのはなんか癪だ。

頼らないで済むならそっちの方が遥かに良いのだ。

「覚悟決めて寝よー・・・」

滑りこむようにベッドに潜り込む。

連日の睡眠不足のツケ精算が来たようで、俺は考え事をする間もなく眠りの世界に落ちていった。

「うわあああああああああああああああす！！！！」

お、お、落ちる！落ちる！落ちるって！！

何も見えない闇のなか、俺は必死に手を伸ばす。

その手が虚しく空を切ることがわかっていても、何度も、何度も、何度も。

知っている、これは夢だと。毎日のように続く、つまらない夢。

だけれどその余りに深い闇は幾度見ようと、怖くて、寂しくて、誰か助けて欲しくて。

だからこうやって無様にも必死で俺は手を伸ばし続けている。

そして、今日もまた誰もその手を掴んでくれずに、夢はそこで途切れてしまうのだ。

俺は布団を蹴飛ばしながら飛び起きた。枕元に置いてある携帯は規則的に点滅している。

「うう、眩しい・・・」

液晶板には不在着信3件の表示。時刻は午前3時26分。まだ真夜中だ。

いない誰かに聞こえるように大きな溜息を洩らし、汗でぐしゃぐしゃになった寝間着を取り替えるためベッドから降りた。

どうにも変な寝相でもしていたのか身体中が軋んでいる。なんだか油の切れたロボットみたいだな。

「泉、クマひどいぞ」

昨日の朝そう言って人のほっぺたつつきまくってたのは誰だったか。最近めつきり老け込んだ長身の男を思い出して、目覚めてから二度

目の溜息。

多分今日も言われるんだろうなあ、と俺は洗面所の鏡を見てまた深く溜息をついた。

ああそうか。今日からあいつはいないんだっけか。そんなことを忘れていたほど今の俺は疲れきっているようだ。

洗いたての寝間着は洗剤のいい香りがして少しだけ落ち着く。

「寝たい・・・」

しかし、どうせ寝たって同じ夢を繰り返すだけ。

そんなこと思いながら、俺は重い足取りで寝室へ向かう。

フローリング張りの廊下は素足には結構冷たい。

眼が完全に冴えてしまわないよう気をつけて、その冷たさを意識しないように俺は歩いてゆく。

今度こそ、見ないぞ。

全く根拠のない誓い。いやもう見てたまるものか。

一体俺が何をしたってんだ、悪夢を見るような悪いことはしてないぞ。

誰に向けていいか解らない怒りを吹き飛ばすようにベッドに飛び込む。

今度こそぐっすり眠れるように固く瞼のシャッターを降ろす。

汗でぐっしょり濡れたシーツは気持ち悪い。

湿り気の強いところから逃れるために寝返りを打った。

そういや、寝不足は人の心を弱くするって、好きなRPGのキャラが確か言っていたっけ。

どうせ見るならゲームの世界みたいな夢溢れる世界がいいなあ、

なんて、自分の馬鹿らしさにまた溜息をつく。
おまけのように欠伸もついてきて、今度もすぐ眠れそうだと俺は思った。

ゆっくりと、着実に俺は眠りの海の波に流されてゆく。

寄せては返す、気怠い波の向こうに見飽きた家族の影を見たような気がした。

いつの間にか俺はまた寝ていたらしい。

そしてさっきの誓いも何のその。俺は結局また落ちている。

一体どこまで俺は落ち続けるのか。

一体いつまで俺は落ち続けるのか。

だんだんと夢の中で意識だけが覚醒してゆく。

そして、落ちる恐怖にいつもどおり取り乱し始める頃合いに、それは起こった。

眩い光が視界に広がる。俺は思わず眼を細めた。

暗闇の中には気がつけば月が1つ、2つ、3つ。ぼう、と浮かんでいる。

夢の世界は月が3つの世界。よくできたファンタジーじゃないか。

案外馬鹿な考えも悪いもんじゃないな。

夢に常識なんて必要ない。しかも何か見えるならいつもより格段にいい夢だ。

こんな夢なら、起きているよりもずっと素晴らしいかも知れない。

次第に世界がはっきりと姿を現す。

雲ひとつ無い夜空にはたくさんの星。相変わらずの3つの月。

ああ、そうか俺は、仰向けに落ちているのか。

頬が冷たくなってきた。

風で寝間着が生き物のように呼吸を繰り返す。

「きれいな空だあ」

大きな声で言ってみる。声は深い夜の黒の中に吸い込まれてゆく。東京の空は星が見えない、なんて歌詞によくあるけれど、この空はとても綺麗だ。

つて星がいくらでも見えるド田舎育ちの俺が考えることじゃないけれど。

それにしても寒い。

現実の俺は、ふとんを蹴飛ばして寝ているのか。

寝ぼけて素っ裸にでもなっているのか。

俺は

「な、ななななんだこいつは！！！！何処から落ちてきたんだ！！！！」

突然の声の方向を見やると、落ちる俺と並走するように落ちている少女がいた。

「おお、ついにこの夢に登場人物が……。感無量だ、アハハハハ・
・・」

俺は身体を突き抜ける風の冷たさに身震いをしながら、しっかりと眼を開け少女を見る。

口を半開きにして、驚いているのかちよつと間抜けな顔でこつちを見ている第一登場人物。

金髪、赤目。魔女っぽい三角帽子に黒の外套。うーん、どう見ても魔女。魔女っ娘。

いったいどこのファンタジーだこいつは。

魔女はブツブツと呟きながら、俺の隣から上空に移動をした。

こいつは落ちているんじゃないか？ 自分か？ 飛んでいるんだ。すこいなあ、さすが魔女だ。

「・・・むう。魔力にあてられているのか。どうにも変だのう。どれ、対象 魔力 放出」

少女が俺に指を指す。

え？ 今のは、呪文ってやつか？

少女の言葉により一気に思考がクリアになる。

俺は改めて少女を見て、念のために空を見て、肌を感じる風をしつかりと確認してまず深呼吸を試みた。

しかし『だのう』ってなんだ『だのう』って。流行りのロリババアってヤツかこいつ。

よし、もう一度現状を確認しよう。いや確認するまでもない。オーケー 落ち着こう。

俺がしなければならぬ行動はもう決まりきっているじゃないか。

「た、たたたたたたたたたた助けてくださいひゃい・・・」

「!?!」

目の前の老婆系少女に土下座する勢いで頼み込む。

恥も外聞もない。というかそんなこと頭の片隅にすらない。

というかどうなってるんだ、夢が夢じゃなくて、現実で夢で？

あー、もうわけがわからん！

ちなみに空中で土下座する勢いで頼み込むとどうなるかの結果は

「ひっぴぎゃあああ！おち、おち、おち、おちおちおち」

「さつきから落ちていてはないか……」

「落ちるー！！」

曲がりなりに先ほどまで安定していた落下が風圧で一気にアンバランスになるということだった。

少女は聞こえよがしに大きな溜息をついている。いいから助けて！

「はああああ……。未熟な魔術師かなんなのか知らんが情けないことだ。」

貴様も魔道の端くれにあるものならシャキッとせんかシャキッと！

「い、いいから早く助けて！！死ぬ！死ぬつて！！」

「ああもう鬱陶しい。他人に飛翔術をかけるなどしたことはないわ。まあ良い、ちよっと荒っぽいかなんとかなるだろ。」

人は、地に足をつけるものなるべし」

その瞬間、俺の落下は先程の比ではなくなった。

「うわあああ！！は、早くなってる！！早くなってるって！！！！！！」

やけに頭に響く言葉の後、急に早くなった落下速度。その異常事態の不可思議レベルなんて全く問題にならない。

このままじゃ死ぬ！間違いなく死んでしまう！！地面にべちゃっと！トマト祭りのトマトにはなりたくない！

「どうせ死ぬなら綺麗に死にたいいいいい！！！！！！」

「えええい！！ウルサイ！！落ち着かんか！！　　されど、大地は、人の仔を祝福するもの。故に大地は仔らを許し、全てを受け止める

「！！！！」

暴れまわっているうちに俺は下を見ていた。

外界はどこまでも続く原っぱ。どんどん近づいてゆく。

ああ、父ちゃん、母ちゃん、ご先祖様、今、泉はそちらに向かいます。トウノ、冷凍庫にカレー入ってるから溶かして食っとけ。

やっぱり痛いのかなあなんて思いつつ、俺は衝撃に身を備える。

もう、駄目だ。こんなことになるならもっと人生楽しんできゃよかった！畜生トウノ、小遣い増やせ馬鹿野郎！

不意に世界が急転する。

気がつくとふわりと俺はその原っぱの上に立っていた。

ここが、天国？地獄？それともヴァルハラ？

なんて考えているうちにまた世界は黒く染まり始める。

この感覚を俺は知っている。貧血のときと同じだ。

「ククク・・・フッフッフ、ブフォツ！・・・ハアーハツハツハ！

！適当な言語魔術が成功するとはやはりこの私、稀代の魔女エルルカ！！フィンは大天才！！」

しかし私が大天才だというのを抜きにしてもこいつ魔力抵抗も糞もないではないか。一体何だというのだコヤツは・・・」

薄れていく意識の中、あの少女のようなババアのような子の悪役臭い三段笑いが聞こえていた。

随分と懐かしい夢だ。

ドタドタと狭いリビングに雪崩込む3人の男たち。
俺は呆然とそいつらを眺めている。背中に感じるのは誰の温もりだ
っただらうか。

「な、誰だ！」

大きな声を上げるこの人は確か俺のお父さん。メガネなんかかけて
随分とお堅そうな人。

全然似てないなあ俺と。まあ本当にこの人がお父さんかなんて確か
める方法ないから便宜上お父さんって呼んでるだけなんだけど。
俺をきつく抱きしめてる日本人形みたいな若い女の方は、流れから
いくとお母さんらしい。こっちも全然似ていない。

「アザミ、
薊イイ、会いたかったぞお」

このダミ声の人はお父さんの知り合いだ。この日の前か後かははっ
きりしないけれど結構な額のお年玉をくれた記憶がある。

お父さんのお腹に、大きなナイフが突き刺さる。

苦しそうに倒れるお父さん。そういやこのナイフ、おじさん良く自
慢して見せてくれてたっけ。

「あ、あ」

この間抜けな声は俺だな。このときは正直何が何だかわからなくて
結構ぼうつとしていた。

後この女の人の抱きしめる力が思いの外強くて、痛くて苦しかった
の覚えてる。

そうだ、この人はすごく震えていた。

さつきから一言も喋らないのは多分怖かったからだと思う。
そりゃあ、おっさん3人組が突然家にやってきたらびっくりするだ
ろうな。

男たちの一人、ぶくぶくと太ったおじさん、豚の蚊取り線香に似て
いる人がニヤニヤ笑いながら女の人に近づいてく。

この人のことはトウノは何も教えてくれなかったな。まあどう見て
も悪人でそれ以上もそれ以下もないけれど。

「花珠、^{カシユ}ずいぶんと久しぶりだなあ」

豚おじさんがお母さんにそう声をかける。お母さんは小さく悲鳴を
あげた。

プツン。

か弱い糸が途切れるような、そんな間抜けな音がしてまた世界は真
っ暗になる。

うわっ！

ん、ああそうかここからの記憶、忘れちゃってるのか。

トウノから聞いた話だとお母さんは豚のおじさんに犯され、薬漬け
にされ、どこかの国に売られてしまったんだっけか。

一体どこの都市伝説なんだか。三流の悲劇ってヤツだ。誰もがみん
な抱えている、在り来りの悲劇。

そういえばこの日は俺とトウノが初めて会った日だ。

そう思って俺は一人ぼけつと突っ立っている長身の、先ほどの3人
組の中では一番若い男を思い出す。

ああ、そうか。この前とおんなじ。今にも泣きそうな顔で、俺を

「目覚めよ。門には鍵がかけられ、何人もそれを通るに能わず」

あれ、この声はさっきの女の子だ。

色の潮流が俺を飲み込み、ぐるぐると洗濯機の中の服のように俺は雑に回される。

「ほれ、さっさと起きよ。朝よ！イズミくん！起きて！」

・・・俺にそんなベタな幼なじみなんていないぞ。

う、眩しいなあ。カーテンしてるのに何でこんなに眩しいんだ？

「あー、最悪の目覚めだ。」

トウノを思い出しながら目覚めるといっつのは腹が立つ。昼間のよう
な眩しさも相俟って俺はそうばやいた。

身体を起こすと節々が痛い。空から墜落する夢ともれなくセツトっ
てか。

「で、トウノとかいう男がお前の親代わりだったのか？」

「あいつが親？そんな訳あるか。出かけてはひと月ぶらぶら帰らな
いで偶に帰ってきてても家事も何もしない、本当の役立たず。」

「・・・まあ、金とかは出してってくれるからそこそこ感謝はしてい
けど」

「・・・そうか」

ん？俺今誰と話してるんだ。

とうにかさつきからずっと誰かが話していたような・・・。

謎の声の方を向くと偉そうにふんぞり返って座っている先ほどの夢の魔女っ娘。

眉間にシワを寄せながら俺を見ている。

「ああああー！！夢で俺を助けてくれたロリババア！！」

なんで夢の住人がリアルでまできているんだ。それともまだ夢の中でも言うのだろうか。

それにしてもさっきの夢は酷かったなーなんて寝起き頭で考える。

ん、さっきの夢ってそっか。さっきのさっきの夢か。さっきの夢はトウノと会った日の思い出、さっきのさっきは月が3つで、空から落ちて……。

これだけ鮮明に夢を覚えてるのも珍しいなあ、ってあれ？

目の前にはさっきより深く額に青筋立ててこちらを睨んでいる夢の登場人物A。

「ほう、最強魔女エルルカ様を捕まえて今なんと言った貴様」

随分ご立腹なようだが見た目がハロウインの仮装で本格的なコスプレをしている白人美少女なので全く怖くない。

おまけに先ほどから動く度に三角帽子のツバに乗った鈴がチリン、と可愛らしい音を立てているのが微笑ましい。

「どうでもいいけど部屋の中で帽子被ってたら禿げるぞ、ロリババア。で、なんで人ん家にいるんだよ。

いくら無法地帯の夢の中でも、勝手に人の家入ったら不法侵入だぞ不法侵入。あ、無法地帯なのに不法侵入って矛盾してるな、アハハハ」

暢気に話しかけると少女は俯いてプルプルと震えている。

うーん、ちょっとババアは言いすぎだったかな？

夢の中ではあるが女の子を泣かすのはどうにもいい気持ちはしない。さて、どうやったら笑ってくれるのか考えていると急に少女は勢いよく顔を上げて俺を睨んだ。

おお、完璧に怒っていらっしやる。

しかし美少女は怒っていても様になるなあ。美しいということはそれだけで特権階級だな。うん。

「だ」

がたん、と椅子から立ち上がると、その少女の仮面を被った鬼は近づいてくる。

小さいのにすごい迫力だ。きゅ、急に寒気が。というか背中に巨大な影が見えるんですけど！

「れ」

その赤の瞳に射すくめられ俺は固まった。

そういやこの部屋俺の部屋じゃないなー、ベッドもやたらでかいし。

なんてちょっと冷静になつてみたりする。

「が」

ピッチャー振りかぶって第一球。

ということとはさっきのアレは現実・・・？今俺は月が3つのバリバリファンタジー世界にいるのか？じゃあこいつも本当に魔女？

「ババアじゃ！糞ガキが！！！！」
「ぐはぁっ！」

ドゴオっと音がして鳩尾に綺麗にめりこむロリババア（仮）の拳骨。
ぐっ、今のは効いたぜ・・・。
今日は良く眠れる日だ、なんて思いながら俺は再び意識を手放すの
であった。

今度は悪い夢を見ないように祈りながら。

夢から夢へ（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

魔女と使い魔

「連絡ご苦労。さつさと主の元へ帰れ。真夜中にレディの家に長居するでない」

明け方の空へ一羽のカラスが飛び立ってゆく。ようやく白んできた空は雲一つない。今日は快晴になることだろう。

石作りの重厚な部屋で彼女、エルルカ＝フィンは苛立ちをその小さな身体一杯で表現していた。

幾度も足を組み換え、舌打ちをならし、手元のキセルを思いつきり吸いては白煙を吐き、陶器のコップの中の酒を一息に啜る。

ちなみにこの酒は赤の国特産の『辛い実』の酒。度数は80%を超える。子供のような見た目の彼女にはおよそ似つかわしくない飲み物だ。

目の前にはすやすやと暢気に眠る先ほど墜落していた少年。

最初は飛翔魔術の失敗かと思っていたがどうにも事情は複雑なようであった。

彼はどうやら異世界からの召喚者、しかも記憶を読む限り人間が暮らす世界から召喚された者らしい。

異世界からの召喚それ自体は、彼女の暮らす世界、銀世界では大して珍しいことではない。

召喚術師という職業の存在が示すように、異世界の存在は公に認められているからだ。

人格をしっかりと持ち、人型をした魔物を異世界から呼び出すことができる以上、人間が普通に暮らす世界があつてそこから呼び出される人間がいてもおかしくはない。

しかし、彼女エルルカの目の前の少年が抱えている問題は簡単なことではなかった。

普通の召喚であれば召喚者と召喚された者の間に契約が取り交わされるが、少年には召喚者が存在しない。

通常召喚された者は、召喚者の魔力の供給が僅かでも必要である。肉体保持の魔力自体は界血カイケツを変換すれば良いのだが、世界に存在している表明をする魔力は召喚者から供給されたものでなくてはならない。

ところがこの少年には何処からも魔力の供給はなく、契約魔方陣も見当たらない。

それならば彼は一般人と何ら変わらないと言えた。

しかし界魔術を行使された証拠として彼の因果律は完全に捻れてしまっている。

加えて原因不明の大規模な空間の歪みが王宮魔術師に補足されていることを先ほどの報せでエルルカは知った。

そして通告なしの召喚術行使を行った召喚師を捕えるために教会騎士団が動いていることも。

召喚者がいれば召喚者にとりあえずの罰金、または研究成果の没収。酷い場合は保護観察もこれに加わる。

しかし召喚者が不在の召喚 基本的にそうだった場合は召喚獣が主を殺したことがほとんどであるが そういったイレギュラーはエルルカの住む白の国では処分対象、すなわち死刑。

それが珍しい素体であれば生涯実験道具となることは確定事項だ。

「胸糞悪い話だとは思わないか、フィーレ」

そう呼ばれた真っ赤な髪の青年は頷く。

「しかし、随分と記憶の構成が滅茶苦茶だな。父母の死亡前後の記憶が全くないのは精神的ダメージを慮れば仕方がないでしょう。しかし映像で見える限り、この頃は5、6歳、それ以前の記憶が全くないことはありえん。記憶を何らかのショックで失ったか、蓋をしているか。ふむ、もう少し調べて見るか・・・」

そう言って持っていたキセルを少年に翳そうとするエルル力をファイレはじつと見つめる。

単純な腕力ではエルル力より数十倍上の炎霊のその視線は非常に冷たい。

「じよ、冗談だよ、冗談。しかし一応この国にも法というものはある。異世界からの召喚者は契約が無い限り殺さねばならんぞ。お前もわかっていようファイレ」

「存じております。しかし主よ、彼の処分については、どうにかお情けを与えることはまかりなりませんか」

「私も大天才とは言え一応一国民だぞ。法を破ることを勧めるとは秩序の炎の体現者たるお前らしくもない」

「改めて、どうかお情けを与えることは罷りませんか、と申し上げます」

「・・・っち。ああもう炎の精霊様はお優しいことだな！」

使い魔を睨みつけていた陰険な眼を抑え、柔らかく眼を細めながらエルル力は眠り続けている少年に眼を向ける。

歳の頃は14、5。身長は160スイル（1スイル＝1センチメートル）を越えたばかりか。

柔らかそうな黒い髪。長く生きた彼女でも余り見たことのない不思議な色の髪。

長い睫毛は静かに眠る少年に作り物めいた印象を与えている。

なかなか私好みじゃないか。

弟子として連れ回しても面白いかも知れない。

先ほどこの私をババアと言ったことを償わせるのもいい。

彼女には珍しく優しくげだった瞳が、妖しい熱を帯び始める。

「……主が保護する気がないのなら私が保護を」

エルルカの考えていることを察したのか、鈍色の瞳が彼の仕えている主人を睨むように見つめる。

「ええい、お前は本当に冗談が通じないな！こいつは！この私！稀代の魔女にして白き炎の魔術師、エルルカ！フィンが保護するっ！文句を行ってくるならば国の連中も黙らせる！これは誓約だっ、二言はない！これでいいかっ！この筋肉ダルマめ！！」

「さすが主、賢明なご判断です。」

安心したのか、フィーレはほっと胸を撫で下ろす。

フィーレとて本気で主を疑っていたわけではない。召喚に応じたと

きからその魔女の本質をフィーレは知っている。
超がつくほどのお人好し。

人に騙されてもそれを自分の未熟だと恥じ、復讐よりも自己の研鑽を選ぶ。

戦乱のあるを風聞しては、金稼ぎと称して薬をタダ同然で配りに行く。商売だと嘯いて。

誰にも、自分にすら弱さを見せない誰よりも強い魔術師。

彼が仕えている主はそんな人物だ。

しかし、そんな強き魔女も一応は人間。

彼女の暮らす白の国の法、しかも第一法、すなわち刑執行の優先順位が高い法を見逃すのは難しだろうと彼は考えていた。

無論、それは杞憂に終わったが。

「しかしどのようにして黙らせるのです？如何に主とて、第一法を破っては……」

「まあ間違いなく糞ガキ没収の上国外追放、酷くて死刑であろうな。」

「……何かお考えがあるのでしょう？」

「フン。……まあな。そろそろこんな国飽きてきたであろう？フィーレよ」

「ま、まさか、お、お一人で戦争でもなさるおつもりですかっ！」

フィーレは自分の仕える主が、喧嘩っ早いことを思い出してその褐色の肌を青ざめさせた。

そういえば、気に入らない貴族を出会い頭に殴ったこともあるではないかこの御方は。

「んな訳あるかつ！この筋肉ファイヤー！引つ越すんだよ！！私を何だと考えているんだっ！」

「・・・常に自身の力のなさを憂いている、心優しき魔術師にして偉大なる魔女、ウィズリルの意思を継ぐ当世ただ一人の正統継承の魔女です。」

「・・・全く調子のいいことだ。まあいいっ！そうとなればさっさとずらかるぞ！お前は荷造りしろ！私は少し出かけてくる！」

「かしこまりました。して、彼はどうするのですか？」

「起きても暴れないようにベッドに縛り付けとけ！運ぶときは魔法の鞆につっこんどく！」

「少々手荒ですが、それが一番安全ですね。承服しました。」

ドタドタと足早に部屋を後にした主を見送り、フィーレはどこからともかく皮製の紐を手にし、規則正しく寝息を立てている少年を見つめた。

この少年は、危うい。

記憶からそう判断しただけではない。持っている力も、取り巻く現状も余りにも不安定。

守らなくては、ならない。

守れなかった人々の為にも。それがきつと償いになるなら。

「おい！」

エルルカの声が回路を通してフィーレの頭に響き渡る。

「先ほど言うのを忘れたが、私を説明するときは大天才というのをきちんとしてけ！このヤンキーへアー！」

「・・・了解致しました。大天才エルルカ様」

顔を赤く染めながら、プンプンと本当に聞こえるように怒っているであろう自らの主人を思い浮かべ、炎の精霊はその厳しい顔を柔らかく微笑ませた。

魔女と使い魔（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

魔女と使い魔？

「あ、あのここは何処でしょうか。」

返事はない。

「ど、どうして俺を縛っているんでしょうか。」

返事はない。

「あ、あのー」

「む、動かないで頂きたい。縛ることが困難になります」

「し、失礼しました・・・」

ロリババアに殴られ気絶して眼が覚めたら髪が真っ赤で、上半身裸のマッチョに俺は縛られている最中だった。

ああ、夢なら覚めたい。

確かに俺は偶にそっちの気があるんじゃないかと人に言われることはある。

女の子と話すのは苦手だし、いつつも得体の知れないおっさんの面倒見てるせいだ。

しかし一応健全な思春期男子。何が悲しくてこんな筋肉に縛られなきゃいけないんだ。

別に男でも見惚れるくらい均整の取れた美しい肢体に嫉妬している

訳ではない。

なんだ肢体って、官能めいた表現だ、本当に誤解受けちまう。ともかく俺はそっちの人じゃないし、こんな筋肉別に羨ましくなんかない！

ああもうあれもこれもそれも全部トウノのせいだ。

あいつがあの時家にいたら多分助けてくれたはずなのに。

俺は偶には便りになる、あの男を思い出す。

いや、こういう考えが俺がホモ扱いされる所以なのか。

くう、ともかくこの現状を打破せねば。

「あのここは何処でしょうか」

勇気を振り絞って先ほどの質問をもう一度言う。

筋肉野郎は意思の強そうな眼でぎっと俺を見ている。う、怖い。

「・・・ここは、白き炎の魔術師、現存するただ一人の魔女、大天才エルルカ＝フィン様の城です」

魔術師？魔女？つーか大天才ってなんだよ、なんでもでかけりゃいってもんじゃないぞ。

というかここはやっぱり異世界ってやつなんだろうか。

「あの魔術師って、いったい・・・？」

「ふむ、泉殿は異世界から召喚されたのだ。知識が無くて当然ですよ。しかし私も主から説明を許されている立場では無いのです。」

申し訳ないが主が帰ってくるまで暫し待っていてください」
「はあ……」

こりゃ駄目だ。悪い奴じゃきつとないんだろっけど頭堅そうだし。
筋肉が多いからだなきつと。

魔術師？魔女？なんで上半身裸？気になることはたくさんあるけれど、これ以上は今が多分無理だ。

きつとこれが覆面の人たちとかに拉致されてたらもつと混乱していったのだろうが、ここまで現実感ないと返って落ち着くことができる。

俺は辺りを見回してみる。

石造りの部屋は6畳の俺の部屋が3つ4つ入りそうな広さ。といっても俺が見える範囲部分だけなので正確なものはわからない。

俺が寝ているベッドはかなりでかく、天蓋付き。俗に言うお姫様ベツドってヤツだなこれは。

隣には小さな丸いテーブルと立派な椅子。テーブルの上には凝った装飾の陶製コップと酒らしき瓶。この酒をあの筋肉が飲んでたら様になるだろうな。むむ、何か腹立つぞ。

ざつと見渡すかぎりこんなもんか。この部屋ベッド以外ほとんどないみたいだ。

時刻は窓から差し込む灯りから見て夜ではなさそうだ。

「泉殿」

「はい？つてなんで俺の名前」

「今は混乱しているかも知れないが決して悪いようには致しません。どうか主を信じて今はお待ちください」

俺は何も言えなかった。

さっきまで怖いと思ってた瞳が思いの外優しくそうで、もしかしたらもう二度と会えないただ一人の家族を思い出していたのかも知れない。

俺が必死で何か言おうと考えていると、木製のドアが勢い良く開かれた。

「帰ったぞフィーレ、そして今すぐ支度せよ、紫の国の城に行く！」

部屋に駆け込んできたのは先程の金髪ロリババア。いやババアって言ったらぶん殴られたんだっけ。うん、次から気をつけよう。

「お早いお帰りで。一体どちらに行っていたのです？」

「教会の將軍様のところだよ。あのガキ、少し脅したらすぐ膝を折りおった。全く情けない！・・・しかし幸運だった。時間稼ぎが効いてる内にずらかるぞ」

「リラ様のことです。こちらの事情もお見通しだったのでしよう。準備はもうできております」

「ふん、どうだか。あいつはいつまで経っても不肖の弟子だからな
っ
っ」

2人の会話に入っていけずにいたら、少女が俺を見て舌打ちをした。

「む、起きているのか。フィーレ、さっさとこいつも鞆に詰め込ま

んか。まさか連れて歩いてく訳もいくまい」

「主よ、その件に関してですが、彼を連れて歩いて行きましょう。その方が彼の為になるはずです」

「何を悠長なことを言っている！紫の国までなんのアシも使わんかつたら三ヶ月はかかるぞ！教会の連中の足止めもせいぜい1週間がいいとこだ」

さっきの話からするとこいつがエル、エルなんだっけ。とにかく大天才様か。

「しかし、泉殿はこれからこの世界で暮らさなければならぬのです。召喚者を探すにせよ、何にせよある程度独立独歩できる力は必須です。これは良い機会ではないですか」

そしてこの筋肉はフィーレと言うようだ。それにしてもやっぱり帰られないのかな。

「何を言っているんだ馬鹿者！そんなの紫の国に行ってから考えれば良い話だ。今はそんなことやってる場合じゃない！」

そつえばムラサキの国って何だ。ムラサキって色の紫のことか？すごい国名もあったもんだ。

「主のことです。どうせ落ち着いたところで何かと面倒を焼きすぎ

て彼の自主性を奪うことになるだけでしょ」

「な、ナナナ何を！私は大天才だぞ！そんな温いことあるか！」

「彼は随分線が細い。あなたの好みではありませんか」

な、なんだと、線が細いだと！このそりゃあ俺はお前みたく筋肉ないけどさ。

言っただけのことと悪いことがある。

「ええい、いい加減にしろ！立場を弁えよ！」

全くだ！

大天才様はキーンツとばかりに腕を振り回している。

「これは失礼致しました。しかし、既に三人分の旅支度はできておりますし」

「この馬鹿炎！ん、いや待て。．．．今までになく強引じゃないか？理由を言え」

「．．．彼は召喚術師としての素晴らしい適性を持っています」

シヨウカンジュツシ？召喚ってアレかサモナーってヤツかな？異世界にきて能力ゲットって有りがちな話だ。

「ふむ、いやなるほど。お前ほど気位の高い精霊が言うのだ間違い無いだろ、だがそれだけではあるまい」

「はい。鞆の中には魔術具も多く含まれます。ですから鞆に閉じ込めるのは危険な可能性があります。」

「どういうことだ。さっぱり意味がわからんぞ」

「自分で言うのもなんですが、この私でも惹かれるほどの魔力色なのです。封印されている魔物その他が出てくる危険もあります。・幸いこの部屋は結界があるので平気ですが非常に危険です。」

「それは本当か。こいつ大して魔力もないように感じるが」

「間違いありません。魔力量はともかく魔力色は異常です」

「ふん、イレギュラーはやはりイレギュラーというわけか。よろしい、こいつも連れてく。支度は任せたぞ。」

「はい、ありがとうございます。」

「後それと私に舐めたこと言った罰は存分に受けて貰うぞ、フィーレ！」

「はい、覚悟しております」

どうやら話が終わったみたいで、フィーレとか言う男が俺を縛り付けている紐を一本一本外していく。

「あ、あの」

いろいろ聞きたいことはあるが、上手く言葉にできない。何か一番大切なことを。

「やっぱり帰れないんですか？」

「ふん、自分の現状を把握できる程度の知能はあるか。その答えは『そんなもんは知らんしわからん』だ。とりあえず帰られる可能性

を少しでも高めたいのならこの私に感謝し尽くすことだ！」

「はあ……」

「詳しい事情は後で話す。どうせ時間はあるんだ。お前は因果律からも外れてるからな。」

ゆっくりじっくり教えてやろう。この大天才エルル力様がな。まあ取り敢えずは簡単に説明してやろう。

オマエ異世界からきた、ワタシ大天才、この筋肉ワタシの奴隷。オマエ殺される。ワタシオマエ助けてやる。」

なんで片言なんだ。うーん、どうにもこの子と話していると気が抜けてしまうというかなんというか。

テレビや雑誌でも見ないような美少女だけれどその偉そうな喋り方はギャップが激しすぎてどうにも奇妙だ。

にしても何が何だかさっぱり解らない。だけど絶対に帰ることができないという訳でもないという事実は少なからず俺を安心させた。

「外し終わりました。泉殿、こちらに服を用意してあります。着替えてください」

いつの間にか男の手には木綿っぽい薄茶の素材の服っぽい何かがあった。

俺は起き上がりそれを手にとる。なんだこりゃ。広げてみるとそれは長方形の袋みたくなっていて、頭と腕の位置らしきところに穴が空いている。これがもしかして貫頭衣ってやつかな。

「着方がわからないのであれば手伝いますが」

「いえっ！いらないます！全然大丈夫ですっ！自分で着られます！」
「そうですか」

少しフィーレさんが残念そうな顔をしたのは置いておこう。

とりあえず、寝間着脱ごう、と指を上着のボタンに掛けたとき、べつとりと纏わり付くような視線を感じた。

「はあっ、はあっ・・・」

見てる。滅茶苦茶見てる。エルルカがじいっと俺の一挙一動全てを見逃すまいとこちらを見ている。

「ど、どうした、早く着替えんか。」

「・・・」

うう脱ぎにくい。しかもエルルカだけでなくフィーレさんの視線も感じる。

「主よ、着替えにくいようです。暫く部屋を出ていきましょう」

意を決して脱ごうとすると意外にもフィーレさんの助け舟があった。渋々といった様子でエルルカは部屋を出ていく。変態ロリババアとかもうアイツはダメダメだな。

「ふー」

ようやくと着替え始めることができた。しかし適当な服だなあ。俺でも作れるんじゃないかコレ。

とりあえず下着姿になり、被るようにして貫頭衣を着る。着る前は大きく見えたが案外、サイズは丁度よかった。

それと最初はゴワゴワしてるのかなあと思っていたけど、結構肌に心地よい硬さで気持ちいい。

少し肌寒いけどまあ、動いたりしたら暖かくなるだろう。

「あの一、着たんですが」

俺が呼びかけるとギイと音を立ててドアが開いた。

「それではこの紐で腹の辺りを結んでください。背中に紐を通す穴があります。」

先ほどまで俺を縛っていた紐よりは太く黒い革素材の紐を言つとおり背中の穴に通し腹の辺りで縛る。

ベルトのようなものだろう。

「この紐は魔術的措置がなされており、魔力色をある程度意図せず

にでも隠せるようになります。努々外さないように」「はあ」

魔術だか魔力だか滅茶苦茶ファンタジーな世界だということは認識できた。取り敢えずは放って置くしかない。

「おい待て、フィーレ。そんな高度な魔術道具、私は知らんぞ。と
いうかそいつがあるなら別に鞆でもいいじゃないか。」

「まあ良いではありませんか。さてもう時間もありません、さっさと出ましよう」

「待て待て！納得行かん！お前その魔術道具一体本当にどうしたんだ！まさか・・・」

「買いました。城の金塊が減ったのに気がつかなかったのですか？泉殿、これを羽織ってください。」

その衣服は一応結界魔術がかけられておりますので見た目以上に安全なんですよ」

そう言つてフィーレさんは俺に藍色のフード付きのマントを手渡した。少し寒かったから有難い。

どうやって着るのかよくわからないので、フィーレさんに着せてもらう。近くに立つとやっぱりデカイなこの人。悔しい。

「勝手に話を進めるな！フィーレ、私が、この私が百年以上かけて溜め込んだお宝を使ったというのか！一体いつの間に使ったんだこの戯け！」

「申し訳ありませんがいつだったか正確に記憶しておりません・・・」

・これでよし。靴はこれを。これは炎の精霊が作った靴です。僅かですが体力の底上げをしてくれますし、何より頑丈です。お履きください」

差し出された靴は茶色いブーツ。精霊が作ったってどういうことだ。サイズは大きいように見えたが履くと丁度良い。

「精霊の作った衣服は、装着したもののサイズに合う魔術がかけられているのですよ」

フィーレさんは不思議な顔をしている俺に微笑む。ほー、なるほど、それは便利だ。しかもすごく軽い。ブーツだけど走るのも楽そうだ。

「精霊の作ったブーツだと！お前使い魔だから霊具は作れないと言つてじゃないか！」

「ですから友人から以前譲ってもらったのです」

「ああもうお前、本当にいい加減に・・・」

「それでは行きましょう。主、泉殿。」

そう言つてフィーレさんは足元の鞆を手に取る。たぶんアレがさつきから話題に上っている鞆だろう。

俺はその広い背中を追う。というやつぱり外でもこの人上半身裸なのか。寒くないのかな。露出狂？

「お前勢いで誤魔化そうとしてるだろ！というか良く考えたら鞆に入れようがどうしようが、魔物を惹きつける魔力色なら関係ないではないか！おのれ、主を騙すとは何事か！」

後ろから怒鳴りながらドタドタと追いかけてくるエルルカが何だかおかしくて俺は何となくほっとした気持ちになっていた。そういえばトウノ以外の人と話すのは久しぶりだったな。そんなことを考えて、これから自分がどうなるかなんて、不安なことを考えることをこの時俺は避けていたのかも知れない。

魔女と使い魔？（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

追記 ひいー、フィーレの口調が大変なことになっていることが付き慌てて手直し。突然敬語になったりわけわかめ。

団長殿の憂鬱（前書き）

僅かでもユニークがあると本当に嬉しいですね。読みづらい点あると思いますがこれからもよろしくお願いします。しよっちゅう改稿すると思いますので、ご迷惑をおかけします。

団長殿の憂鬱

カリ、カリ。

豪華な騎士長専用の執務室は意外と寒い。

私は身震いしながら、酒入りの紅茶を含む。

今書いている書類は先程の未通達の界魔術行使の報告書だ。

あれもそれも、先程エルルカ様が窓から執務室に飛び込んでくるや否や

「さっきのアレ、無かったことにしろ。師の命令に背いたらどうなるかわかっていような？」

なんて仰ってきたからだ。

エルルカ様は本当に無茶苦茶なお方だ。

あれだけの規模の界魔術行使を見逃すなんて都合の良い話早々あってはたまらない。

私にも立場と言うものがあり、法の体現者たる教会騎士としての誇りもある。

だがエルルカ様の子弟として私の最初の誓約は『師の命に決して背かぬこと』

・・・八方塞がりとはこのことを言うのだろうか。

そんな訳でこんな夜明けまで書類を何とか弄り回している。

落とし所とすれば一週間程度搜索を遅らせることだろう。しかし本当にできるのだろうか。

コン、コン。

ドアが叩かれる。私はペンをインク壺に突っ込んだ。

「誰だ？」

「副騎士団長ヒューム、ただいま参りました」

「む、入れ」

入ってきた壮年の男は私の右腕たる副騎士団長ヒューム。

元は奴隷身分だったというのに叩き上げでこの地位まで来た優秀な人物だ。

生まれのせいかわ魔術は不得手ではあるがその槍術たるや白の国一と言って過言ではない。

これは鼻屑目でもなんでもない。恐らく魔術なしの勝負だったら私でさえ負けるだろう。

しかも冴えているのは武の方面だけではない。各国を回ったという知識は幅広く、政治学から簡単な医学まで修めている。ああ、ヒュームはかっこいいなあ……。

そう、何を隠そう彼は私の初恋の人にして純潔を捧げるべき人物だ。

彼との出会いは私の叙任式の後だった。

前任の団長は年齢を理由に辞任。規定により副団長も退任していた。副団長の人事と言うのは外部から功績のある者が団長の任官後に議会から推薦される。

これは騎士団の権力もとい教会の権力を上げすぎないための措置だ。歴代の団長のほとんどが副団長との軋轢に悩まされていると聞いていた私は憂鬱を隠せないでいた。

「団長になれたのは嬉しいけど、このままじゃ行き遅れになっちゃうよ……」

私が物思いに耽っていると、ドアがノックされ、そう先ほどのように長身の壮年の男が入ってきた。

固そうな黒髪は全て掻き上げられ油で固められている。鋭く光る青い瞳は武人のモノだ。

こいつ、強いな。戦士の嗅覚で観察をする。

真新しい甲冑を着ている彼が副団長であるとき私は確信していた。

「失礼致します。この度副団長に任命されたヒュームと申します。元奴隷階級のため姓が無いことをお許しください。

リラ＝メイスト団長でお間違いないありませんね。・・・ああ、噂に違わずお美しく聡明そうなお方だ。あなたの下に仕えることができ
光栄です。」

「・・・安い世辞は良い、ヒューム副団長。挨拶ご苦労。我々は法に仕える騎士だ。私に仕える必要など無いぞ。

議会派、教会派関係なく我々はこれからは同僚だ。例えその思惑がどうであれ、仲良くしたいものだな。」

「はい。私もそう思います。・・・ところで団長殿、詩は読まれま
すかな」

「随分と不躰だな。私も騎士だ。ある程度は嗜んでおる」

「これは失礼しました。しかしそうですか。私もよく詩を読みます」

「ふん、嗜む程度だと言っているだろう。しかしその年で詩とは随
分と雅やかなことだな」

「お恥ずかしいことです。しかし詩を好きでいて良かった。あなた
と血生臭い話だけでは寂しいですからね」

そう言って朗らかに笑う男の邪気のなさに私は気がつけば恋をして
いたらしい。

今まで、騎士として武術魔術の修練の傍ら、いつか誰かのお嫁さん
になりたいと思い、料理やら裁縫やら詩歌を学んできた。

それをこの男に捧げたら、枕を共にし、愛の詩歌と一緒に語れたら、なんて……。

と、いかんいかん。今は腑抜けている場合ではない。

「どうしたんだこんな夜更けに。すまんが案件が溜まっていてな。要件を言え」

「はい。団長、先程の界魔術ですが……」

ま、マズイ。というか魔術ベタなヒュームですら気がつく魔術行使をどうやって隠し通せばいいのだ。

「ん？んん？そ、そんなの無かったぞ！な、何を言ってるんだ、寝ぼけているのか、アハハ……」

「……『界魔術行使の報告』とその書類に書いてあるようですが」

「……うっ！」

うわあああ！このままじゃヒュームに嫌われる。私の馬鹿ッ！エルルカ様のババア！

とうか上にバレル！ヒュームに嫌われてエルルカ様に呆れられる。おまけに団長をクビ？最悪だ！

……なんとか言い訳をしなくては。ああエルルカ様、恨みます。

「ふふ、団長、こんなことではお偉方は騙せませんよ。失礼ですが書類をお貸しください。何とか致しましょう」

「へ？」

どうしてヒュームがそのことを知っているの？と私が混乱していると、失礼とばかりにヒュームは私の机にある書類を来客用のテープ

ルに攫っていく。

「先ほど白炎の魔術師殿が参られて事情をお話くださったのです。法の守護者たる教会騎士として許されないことですが、罪の無い少年を殺すことは私にはどうしてもできません。」

私は一人の騎士でありますから。魔術師殿と団長の悪巧み、このヒュームも協力させて頂きます」

「あ、ああ。って少年！？何だそれは、私はそんなこと聞いていないぞー！」

師匠はただ『なかつたことにしろ』としか言っていなかった。

私に言わないでヒュームに言うとはどういうことだ。というかなんてヒュームに話したんだ。

「おや、そうでしたか。・・・ああ、実は私とエルル力殿はここに勤める前から親交がありまして。団長が任命される際に後見を頼まれていたのですよ。」

本当は黙っていると言われていましたがこの際いいでしょう。」

「そ、そんな。お前、じゃあ私の任官のとき・・・」

「ハハハ、団長が詩を愛していらっしやったのは聞いておりましたからね。警戒を説くために一芝居打ったわけです。」

無論私が詩を好いているのは事実ですよ。ここだけの話ですが議会もあのお方が手回ししたそうです。団長は本当に師に愛されていますね」

ニコツつと微笑むヒューム、やっぱりかっこいい。いや今はそれより、ヒュームと師匠が前から知り合いたと？

以前から師匠には私の恋愛相談に乗って貰っていた。何せ師匠は今年で263歳。人生経験は豊富だろうし恋愛についてもいろいろと知っているだろうと思つてのことだ。

しかし、知り合いつてことだ、あの人の性格なら絶対……。

「先に言っておきますが、私は団長のお気持ちに今はお応えできません」

バラしてやがった、あの糞ババア！100歳鯖読んでる癖に若者の未来を邪魔しようと言つのか！

「しかし」

「？」

「それは団長が私には美しすぎるからです。……ですからもう少し待っていてください。団長に釣り合うような男になれば私から求愛致しますよう」

ズキーン！

か、か、かっこいい！ヒュームはやっぱり世界一だ！

「さて、早速ですが書類の改竄から始めましょう」

「う、うん。あたし、どうしていいかわからなくて」

「……団長、そういった口調は風紀の乱れに繋がります。謹んでください。」

「うきゅう……」

白の国教会騎士団団長リラ＝メイスト31歳。彼氏いない歴31年。花嫁修業が少しだけ報われた一日であった。

団長殿の憂鬱（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

魔女と使い魔？（前書き）

説明回な感じですが。

魔女と使い魔？

「お！あれは魔女様の馬車じゃないか」

「魔女さま、この前はお薬ありがとうございました」

「まじよさまー、あそぼー」

小さな村のど真ん中を走る街道はお祭りのような騒ぎになっている。

「ええい！煩いぞ、愚民ども！ジヨナサン、処方した薬は酒で飲むなどいうことを忘れてはおるまいな！エリカ、腹の子供のために栄養をきちんと取れ！金が足りぬなら旦那を殴っても働かせよ！ヨシユア、お前今年40だろ、さつさと結婚しろ！母親も安心して死ねんぞ！ええと、それから・・・」

幌馬車から顔だけ出して、怒鳴り続けている少女もとい老婆。シユールな光景だ。

「す、すごいですね」

「主は慕われておりますから」

御者台のフィーレさんが自慢気に微笑む。

俺たちはあの城を出てから広い道を馬車でずっと突っ走っている。

歩いて行くと聞いていたから少し拍子抜けしたけれど、文句を言える立場では無いのでとりあえず黙っている。

そうそう、あの城と言ったが、本当にあそこは城だった。ヨーロッパの山奥に佇む古城って感じかな。廊下は真っ赤な絨毯がひかれて、なんだかよく解らないけど高そうな花瓶とか絵画が飾ってあったし、入り口のホールには騎士の鎧がババァと並んでいた。

こんな状況でもなければ記念撮影でもしてトウノに自慢してやりた

いくらい凄かった。

「でも、こんなに目立って大丈夫なんですか？俺、追われてるんですよね」

「心配には及びません。リラ殿が足止めをしていますから」

「はあ・・・」

足止めしてくれている人もまさかこんな目立つ逃走劇を繰り広げるとは思っていないだろうな。

「おい、そろそろ飛ばしていいぞフィーレ。大体終わった」

叫び続けて疲れたのかぐったりしながらエルルカが座り込む。近くで見ると彼女は本当に美少女だ。

その金の髪は絹系みたく艶々していて白い肌は興奮のせいか紅潮している。

余り広くない幌馬車の中じゃどうしても近寄らなくてはならなくて、俺は彼女の甘いハチミツみたいな匂いにクラクラしながら彼女に近づいていく。

エルルカの綺麗な顔な悪戯な子猫めいた微笑を浮かべ・・・

「チツ、そのフード、なかなかの魔術防御だな。誘惑魔術の効きが随分悪いぞ、フィーレ」

・・・はい？というかこの馬車結構広い。6人は優に入れるだろう。俺は慌ててエルルカから離れる。

「どうした坊や、目の前にこんな美少女がいるんだ、さあカモーン」

は、腹立つ。エルルカの眼がタクワン型になってニヨニヨこちらを

見ている。

子供の癖に生意気な。俺は思わず彼女の頭を拳骨で軽く殴った。

「い、いてっ！おい！貴様立場を弁えぬか！この大天才エルルカ様に手を出した罪は・・・」

「悪ふざけはいい加減にしてください、主よ。そろそろ村も抜けました。良い頃合いでしょう。」

泉殿、我々はあなたのことをほとんど知らない。順序があべこべになって申し訳ないが、自己紹介をお願いしたいのですがよろしいですか？」

「オイ！勝手に進めるな馬鹿者！いいかイズミ！自己紹介するんだ自己紹介！」

なんだか滅茶苦茶だがそういえば俺も実際何が何やらまださっぱり解らない。

城から出るときはフィーレさんとエルルカがずっと言い争っていて（エルルカが一人で騒いでいただけけど）なかなか話しかけられなかった。

とりあえず自己紹介をしよう。

「俺の名前はなぜかもう知ってるみたいだけど、俺の名前は泉。年齢は16歳。男。日本って国出身。」

えつと寝てたら空から落ちてる途中だった・・・？」

「なんだその訳の解らん自己紹介は」

「ごめん、俺もよくわかっていないんだ。夢だと思ったら夢じゃないかと、えーと」

「失礼、泉殿、貴殿に姓はないのですか？我々の世界では姓の無いことは奴隷階級を意味するのですが」

「ど、奴隷？まあある意味奴隷っちゃ奴隷だけど」

俺が奴隷なら家事奴隷ってヤツだなたぶん。にしてもこの世界、奴隷っているんだ。

「お気を悪くしたなら申し訳ない」

「いやー、全然大丈夫です。俺の世界には多分知っている限り奴隷階級はいないですよ。えっと俺の姓でしたね。確か今は川田だったけな」

「奴隷がいないか、そいつはいい。んで、お前の姓カワダだったか？変な響きだ。それに『今は』とはどういう意味だ？」

「ああ、扶養者がしょっちゅう苗字変わる人だったからなあ。」

「??????」

胡散臭げな眼でエルルカが俺を見てくる。・・・しょうがないじゃないか事実なんだから。

俺の面倒見ていたトウノは何の仕事しているか分からないが苗字がよく変わる男だった。

といっても苗字が変わったところで俺には何の関係もない話だったから特に困ったことは無いけれど。

結婚詐欺で金を稼いでいたっていうのが俺の予想。つくづく最低な男だ。

「まあ良い。次は我々が自己紹介しよう。私は白き炎の魔術師にして正統血統の魔女、大天才エルルカ＝フィン。んでこいつは筋肉ダルマだ」

「・・・私はエルルカ様の使い魔、火の精霊、フィーレと申します。

筋肉ダルマ、いや確かに筋肉ダルマだ。くそ、羨ましい。

エルルカは魔女っぽい格好だとは思っていたが案の定魔女か。安易すぎるぞファンタジーワールド。

「ゴホン、それでは泉殿には現状の説明をしなければなりませんね。・・・一度で全てを教えることは不可能ですからまずは簡単なことから説明しましょう。」

そう言つてフィーレさんは手綱を離した。つてあれ手綱離していいのか！？

「ああ、大丈夫ですよ。彼らは利口ですから意図を理解してくれています。主よ、私が説明して良いのですね？」

「あー、メンドイからパツパとやってくれ。どうせ説明したところで自分で実感しないと覚えられないだらうけどな」

本当に面倒臭そうに手をヒラヒラとふるババア系少女。

フィーレさんが手綱を置いても馬車を引っ張る馬のような生き物はブレずに走っている。

本当に利口な動物だなあ。後で撫で撫でてこよう。

「それでは説明させて頂きます。まずこの世界の話をしなければなりませんね。この世界は通称銀世界、もしくは銀大陸ともいいます。人間は第一世界とも呼びますね。人、精霊、魔物が共存する世界です。

五大国、我々が今いる白の国、黒の国、赤の国、青の国、黄の国、それと無数の小国によって成り立っています。ちなみ我々が今向かっているのは紫の国というところです。」

ふむふむ。銀世界って雪でいっぱいなのやつみたいだな。しかしやっぱりというべきか精霊とか魔物とかいるのか。・・・ちょっとワクワクする。

それと国名が色というのはこちらでは普通のことなのか。まあ覚え

やすくっていつか。

「続けます。今第一世界と申し上げましたが、無論第二世界、第三世界もあります。

第二世界は通称金世界、神、精霊、魔物の世界で召喚された者は基本的にここ出身です。私の故郷もここになります。

そして第三世界、これは銀、金世界以外の雑多な世界で、泉殿の故郷もこの何処かでしょう」

「雑多な世界の1つか、俺のふるさと・・・」

雑多な世界の1つ扱いはちょっと哀しい。まあ確かに碌でも無いところではあったけれど。

神様のいる世界が第二世界っていうのも人間の傲慢ここに極まれりって感じだなあ。

「ところで泉殿は魔術を使えますか」

「魔術？とんでもない。俺は一般人ですよ。魔法とか魔術とか、俺のいたとこじや物語のなかでしか存在しないものです」

「ふむ、なるほど。泉殿の世界では魔法は架空の存在と。もしかしたら第三世界外からの召喚もあり得ますね」

フィーレさんは少しだけ考えるような素振りをして一息つく。

「魔法とは、霊血、すなわち行使者の魔力を供物に、界血、すなわち大地に満ちている魔力に働きかけ事象を操る神秘術の総称である。』。これがこの世界での魔法の定義となっていますが、この説明で理解できますか？」

「うーん、MP消費してファイヤーするってことかな。なんとなく大丈夫です。」

「それはよかった。魔法の中で人が主に使うものを魔術、精霊が使

うものを精霊法などといって区別しますがそれは今はいいでしょう。」

ふんふん。専門用語っぽいのはさっぱりだけど、魔法はいろんなすごいものの総称ってことね。よし！オーケー。

「さて、ここまでで何か質問は？」

そうやってフィーレ先生は一旦話を止める。

エルルカは、椅子にもたれ足をブラブラさせている。だらしないなあもう。

それにしても質問か。何かあるかな。

「んと、まず俺はその魔法によってこちらに来てしまったんですか」「恐らくそうだ、としか今は言えません。あなたが召喚者を殺していない以上、召喚者がいないなどと言ったことはあり得ないのでが。・・・そうだ泉殿、召喚者に心当たりはありませんか」

そんなこと言われてもなあ。俺はクビを振って解らないということ伝える。

少なくとも俺の知り合いに魔法使いはいなかったし。

「泉殿が召喚されたことは召喚魔術と必ず関係があるはずですよ。それは別名界魔術といって霊血を媒介に界血を供物として捧げ、異世界から生物を呼び寄せ使役する特殊魔術です。」

その成り立ちから正確には魔法とは異なるものなんですが、一応魔法の一種として数えられています。

他にも特殊な魔法はいくつかありますがおいおいそこは教えていくこととしましょう。」

あ、頭が破裂する。レイケツやらセイケツやらなんなんだ。魔法なんだか魔法じゃないかはつきりしろ。
ん、そういや、俺が召喚術師として才能があるってさっき言ったな。ということとは

「もしかして俺、魔法使えるんですか!？」

「魔法は修練さえこなせば基本的に誰でも使えますよ。もっとも才能も重要ですが」

おお!？そいつは嬉しい。

俺も男の子だ。魔法をバンバン撃つのは結構憧れている。

「才能といえば、泉殿には召喚術師の稀有な才能があるとお見受けします。召喚術そのものは複雑ではないので後にでもエルルカ様にお聞きすると良いでしょう。きつと役に立つはずですよ。さて、他には質問はありますか？」

質問他にあるかな。なんで空から落ちてきたんだ、とか月が3つなこととかも気になるけれど……。
そういえばこの世界にアレはあるのだろうか、ふと俺は思い立った。

「そうだ、この世界には病気はありますか？」

「……風邪やら何やらのことか？無論あるぞ」

黙っていたエルルカが口を開く。

「いや、そつちじゃなくて、なんというかえーと」

「さつきから煮え切らんやつだな。男ならなんでもシャキつと言わんかシャキツと」

「むむ、実は俺の世界でもよく解っていなかった病気なんだ。ほと

んどの人がかかっていたんだけど誰一人助かってない」

「・・・ずいぶん剣呑な話だ。お前もかかっているのか」

「うん、俺もかかっているよ。でもまあ調子いいみたいだし大丈夫かな」

そういえば二人とは数時間以上一緒にいるけれど何も症状は出ていない。

「それは伝染性のものなのですか？治療術を行った方がよいのでは」

「あー、それは大丈夫ですよ。病気がつて言ってもウイルスとかそういうの原因じゃないからこれは伝染らない」

「ういるす？何だソイツは。しかし症状が出てはマズイではないか。どのような症状なのだソレは」

「この病気一人ひとり症状違うんだけど、確か俺は記憶感応症だったっけかな」

「記憶感応症・・・？どういった病気だ」

「うーんと、口で言うのメンドクサインだけど人の記憶を自分のものにしちゃう病気かな」

「・・・そんな病気、聞いたことがありません。では我々の記憶も読み取れるのですか？」

「へ？どうだろう。自分の意思とか関係ないから入っちゃっうことはあるかも知れないです。あ、迷惑ですよ、すみません」

「いえ、構わないのですが・・・」

困った顔をするフィーレさん。人に記憶を見られるのはいい気がしないよな。全く厄介な病気だ。

「ふん、お前の記憶が読みにくいのはその変な病気とやらのせいかな」

「主よ！」

「ふへ？」

記憶を読む魔法、いやエルルカは人っぱいからこの場合魔法か。魔法はそんなことできるのか？

「お前が暢気に寝ている間に記憶を調べさせて貰ったぞ。幼いときの僅かな記憶以外は断片ばかりで意味不明だったが、その病気のせいか」

「ああ多分そうだよ。色んな人の記憶が頭に突然入ってくるせいで物忘れが激しいからな俺」

「今は症状は出ていないのですか」

「うーん。たまたま落ち着いているだけかも知れないけど今のところ大丈夫ですよ」

「ふん、因果律に引きずられたせいで回復したのかも知れんな」

「そういえば因果律ってさっき言ってたね。ソレ何？エルルカ」

ふんぞり返って話しているエルルカに尋ねる。

「・・・オイ、そういえばどうして私にはタメ口なんだ、お前より十倍は年上だぞ」

「いーじゃん、別に。見た目子供なんだし」

「ぬおお・・・、ここまでの無礼狼藉、何十年ぶりだ・・・」

「・・・主よ、住んでいた世界が違うのです。致し方有りません。しかし因果律は間違いなく変わっているのですか？」

「チツ、教育は後か。仕方ない・・・因果律の変更は間違いがないぞ。界魔法行使の痕跡がしっかりと残っているからな」

「どゆこと？」

「つまり、お前は年もとらんし、メシもいらんし、糞も出ない、霞食って生きていけるってことさ」

「・・・え？」

「我々使い魔と同様になったということですよ、泉殿」

「ええー!!」

なんてこつたい。ご飯も食べられないし、毎朝の快便タイムも楽しめないだなんて!

永遠の少年とかピーター ンじゃあるまいし。

「別に良いではないか。案外楽なもんだぞ。食費もかからんしな」

「んん? エルルカもそうなの?」

「わ、私か。えー、いや、私のことはどうでもいいだろう!」

突然ギャーギャー怒り出す大天才様。そんなに怒っていると血管切れるぞ、全く。

「・・・主は、界魔術の実験に失敗して因果律が捻じ曲がったのですよ」

「戯け!勝手に言うな!」

「彼の過去を勝手に覗きみたんです。ご自分の過去が明かされることくらい当然でしょう」

「ぐぬぬ・・・、言うではないか赤筋肉・・・」

悔しそうにプルプルしているエルルカ。その振動につられて頭の帽子の鈴がリンリン鳴って可愛い。

しかし年を取らないって不老になるってことか。

異世界に召喚されて不老になって謎の能力ゲットって、よく考えたら結構運いいんじゃないか俺。

「それじゃエルルカは見た目通りの年じゃないってことか。一体何歳なんだお前。年寄り臭い話し方だけど」

「・・・聞いて驚け、163歳だ」

「263歳の間違いでしょう、主よ」

「に、にひやく・・・!?」

「ふん、100歳も200歳も大して変わらん、私が大天才かつ超美少女なのは周知のことだしな!」

なんだかよくわからない理論をエルル力は振りかざしている。

しかし見た目通りの年齢ではないんじゃないかとは思っていたけどここまでとは。

因果律とやらの効果が無ければヨボヨボもいとこだな、コイツ。見た目はどうあれ、やっぱりババ・・・

「おい、それ以上、余計なこと考えたら生きたまま燃やすぞ」

年齢なんて関係ないよね!可愛いは正義!

「・・・因果律の変更は成長期の泉殿には辛いことでしょうが、どうか気を強く持つてください」

いかにもお劳しい、と言いたいような眼でフィーレさんは俺を見る。ん?成長期の俺に辛い?・・・それってもしかして、

「うははははは、私と一緒に、お前もずっとガキのままだ!良かったなイズミ!ざまあ見る!」

エルル力は腹を抱えて馬鹿笑いしている。く、このガキ人事だと思つて!

「う、嘘、じゃあ俺もう身長・・・」

「はい、伸びません」

「筋肉は・・・」

「基本的に身体能力も一切変わりません」

この現実は今までで一番キツイ現実かも知れない。どうせ前の世界にいたって居場所があつたわけでもないし、いつも一人だつた。

それならこの世界で気楽にやればいいか、なんて軽く考えていた俺には重たい現実。

いつかトウノよりもでかくなって踏み潰してやるのが夢だつたのに、これは結構クるな・・・。

「さて、こんなものでしょうか。魔術に関してより詳しい話は私よりも主にお聞きくださつた方が良いでしょう」

「あ、はい、ありがとうございます」

フィーレさんは優しく笑っている。真顔だと精悍で鋭い印象だけど、笑うと少し子供っぽい。

そういえばお礼をちゃんと言っていないな。

二人は自分の国を捨てて俺を助けてくれているのに。

お礼、言わなきゃ。

「あの、二人共、本当にありがとうございます。今更だけど国を・・・」

「ふん、そこまでにしておけ。礼を言われる筋合いはない。やりたかつたからやつてるだけだ。」

「でも・・・。あ、エルルカ、中々言えなくて悪かつたけれど、あの時俺を助けてくれてありがとう」

「む？ああ、墜落していたお前を助けてやったことか。子供は気にするな。大人として当然だからな」

「・・・それでもだよ。ありがとう」

「ふん、受け取っておいてやる。私は心が広いからな。」

いいか、お前は精々堂々と私の厚情を感謝して受け取っていれば

いいんだ。

どうせ私も無駄に年を取って暇していたところだ。年を取るとな、面倒事は中々に刺激的で面白いのさ」

ニヤリ、と不敵に笑う金色の少女。隣で瞑目して微笑む赤色の偉丈夫。

どうして、この人達は自分の居場所を捨ててまで俺を助けてくれるんだろう。

ずっとさつきから胸に引つかかっている疑問。

だけれど俺はそれを結局口にすることはできなかった。

知らなくても幸せなら、知らないままでいい。俺はそれで充分だと思っ。

「そうだ！おいフィーレ、酒を出せ。これからしばらくは一緒にいるんだ。家族が一人増える祝杯を上げてやろう。」

「家族……？」

「どうせお前は这个世界では天涯孤独なんだ。だから私たちがお前の仮初の家族になってやろうというんだ。」

ほら、だからさつきと私を崇めよ。私には敬語を使え！今すぐだ」

居丈高にそう言うエルルカの顔が余りに眩しくて

俺は少しだけ眼を細めた。狭い視界は滲んでいる。

一度眼を瞑って、それからもう一度彼女たちを見よう。

この世界での俺の大切な家族を、忘れないよう眼にしつかりと焼き付けるために。

魔女と使い魔？（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

少年は少女と出会う(前書き)

やっとここまでたどり着いた・・・。

少年は少女と出会う

ガタン、ドタン。

幌馬車は結構な振動の中順調に進んでいる。

時刻はそろそろ夕方な頃合いだろうか。

この世界にはどうやら時計は無く、割りとみんな適当な時間感覚を
持って生活しているらしい。

日が登れば起きて、日が沈めば寝る。

ちなみにエルル力達は寝る必要がないので、気が向くままに寝起き
しているんだって。

全くこいつは適当なばーさんだな。あ、でも俺もそいつ生活が今
はできるのか。

ゴトツ、ゴトゴトツ。

揺れが相変わらず激しい。

向かいのエルル力はキセルを吸いながら何やら難しい顔して本を読
んでいる。

せっかく家族になったんだからもっと話したっていいだろうに。

フィーレさんはフィーレさんで御者台から戻ってこない。

ガタン、ドゴオ。

それにしてもすごい。

というかもう無理。我慢出来ない。

二人への感謝とこれは関係ないと思う。無理なものは無理。

「エルルカ」

読書の邪魔をされたのが気に食わないのか不機嫌な顔でエルルカはこちらを向く。

「ケツ痛い」

「・・・知るか。我慢しろ」

駄目だ。取り付く島もない。

しょうがない、フィーレさんにお尻に敷くような物を頼もうか。

「お、そうだ、いいこと思いついたぞ。イズミ、お前ケツ出せ」

「はあ！？何言ってるんだよ！？」

何を言いますか、このロリババア！

御者台のフィーレさんも今ビクツとしてたぞ！

「ケツを撫でてやろう、くけけ」

「結構です！というかお前、いい歳なんだろう、そんなこと言ってる恥ずかしくないのか！」

「これは年を取ってるから許されるのだ！何だ、私のような美少女にケツ撫でられることの何が不満だ！」

「まず態度が気に食わない！それと俺はもっと、なんとというか柔らかない感じの大人の女の人が好きなんだよ。お前は守備範囲じゃない！」

「つくづく無礼なヤツだお前は！ふん、まあいい、ならばケツはしばらく我慢しているんだな。」

なあに使い物にならなくなったところでもう糞する必要は無いんだ、構わんじゃないか、フハハハハ！！

「・・・ん？いや待てよ」

ピタツと急にエルルカが高笑いを止める。
そして顎に手を当て、暫し思案顔した後

「ふむ、フィーレ、お前コイツのケツ使うか？」

「いいかげんにしろ（してください）！！！！」

さっきまでのエルルカの評価は全部マイナスに取り替えた！

少しでも良いヤツだなんて思っていた俺が間違いだった。

こいつはどうしようもなく下品で性格の悪いロリババアだ、いつかギャフンと言わせてやる。

「泉殿も暇なら、魔術のことを尋ねるなりすることあるでしょう！
尻が痛いなど男子なら言うべきではありません！」

な、なんで俺も怒られるんだ！

エルルカはざまあ見ろ、と言わんばかりに俺を見ている。

しかし、筋肉様は偉いのだ。彼に逆らうことはできない。

というか逆らったらやつかみたいじゃないだろうか。いいなー筋肉。羨ましい筋肉。

「じゃあエルルカ、魔術教えてくれよ。こつマツチヨになる感じの」

「無いわ、アホ」

「じゃ、じゃあ身長伸ばす魔術は？」

「おお、借体法なら知っているぞ。まあお前の霊血の量じゃまず無理だな」

シヤクタイホウ？何だかわからんが、霊血って確かMPのことが。そっぴや俺のMPってどのくらいあるんだろっ。

「その霊血？ってヤツ俺どのくらいあるんだ？」

「どのくらい、と言われても数値化できるワケじゃないからなあ。どれ、少ししっかりと調べてみるか」

パタンと分厚い本を閉じ、エルルカはチヨコンと俺の隣に座った。ち、近い。いやいや待て待て。こいつはどう見ても小学生サイズのちびっ子だ。恥ずかしがる必要なんて無いんだ。ドーンと構えていようドーンと。

「・・・なんだあ坊や、顔が赤いぞ？フフン、欲情してしまったのかあ？」

「煩い！さっさとやるならやってくれ」

「・・・つまらんのう。ほい、それじゃ失礼」

そう言っつて額を肩にくっつけてくるエルルカ。

「お、おい、ちか・・・」

「静かに」

エルルカの帽子の一部に変な模様が青白く浮かび上がる。

円形でゴチャゴチャして解りにくいけど、これってもしかして魔方陣ってやつかな。

「ついでだ、説明しておこう。基本的に魔術においては呪文よりも魔方陣の方が効率が良いものとされていいてな。

ほとんどの魔術を使う者は普段からよく使う術式を陣化して身体や衣服に書き込んでいるのだ。

こうしておけばいつでも使いたいときに魔力を込めるだけで使えるからな。詠唱する時間もいらん」

なるほど。それは確かに便利だ。
エルルカが帽子を取らないのはそういう事情があるのか。ん、ああ
ハゲを隠してい

「察しの通りこの帽子には私の研究成果が大量に書いてある。
決してハゲを隠しているわけではない」

るわけではないらしい。

「よし、いいぞ。わかった」

「おお！で、どうだった？やっぱり異世界補正ですごい魔力持つて
るんだろ俺」

「・・・」

あれ？エルルカの俺を見る眼が少し生温かい。

「えー、簡潔に言おう」

「うんうん！」

「やっぱりお前魔力全然無いな。これじゃまともに魔術使えんぞ」

へ？嘘？

異世界じゃ俺の人生イージーモードの予定だったのにどうして。

「まあ全く使えんという訳でもないんだ、気を落とすな。一発くら
いな人殺せるくらいの魔力弾はぶっ放せるぞ」

「そんなのはいらないよ！空飛んだり、瞬間移動したりできないの
俺！？」

「あのなあ・・・。まず誤解を解くために言うが、最初に私がやつ
ていた飛翔術は超高度な魔術でほとんどの者ができん。というか私
でさえ15分程が限界だし大して速度は出ない。」

それと瞬間移動についてだが、これは先程話した界魔術に含まれている。しかし、自分自身への界魔術の方法は疾うの昔に失われているし、他者に界魔術をかけるのも、契約を行った者相手に限られている」

「意味わからん！日本語で話せ！」

「なんだその二本五とは！二本なのか五本なのかはつきりせい！」

あれ？そついや言葉ってどうなってるんだ。

どう見てもフィーレさんもこのババアも日本人じゃないのになんで日本語なんだ？

「そついえば、言葉って・・・」

「ああ、お前は因果律がこっちの世界のモノに曲げられているからな。言語は勝手に変換されているはずだ。

向こうの世界で読み書きがきちんとできていたなら文字も大丈夫だろうよ。」

そつ言つてエルルカは先程まで読んでいた本の表紙を指さして俺に見せる

んー、なになに。『第三世界への召還法についての考察』

おお、読める読める。便利だ因果律。身長伸ばしてくれれば言うことないというのに。

「おお読める読める。　んで、魔術は俺には無理なのかよ」

「・・・いや、方法はきちんとある」

「なんだよ、あるなら勿体ぶらずに言えよ、エルルえもん」

「んあ？お前は時折わけわからんな。というかいつつもわけわからん。　ほれ、これをやろつ」

エルルカは帽子の中に手を突っ込んで一冊の本を出して俺に手渡す。

絶対に突っ込まない、突っ込まないぞ。

「なんだこれ？」

「魔術道具ってヤツだ。元々は魔術の使えない貴族のために作られた召喚魔術の補助道具だな」

あ、そういや俺召喚魔術の特性あるだか何やら言ってたっけ。分厚くて殴られたら痛そうだな本には小難しそうな文章がババァと書いてある。

なにに、血、痛覚、夜、月、右手、羊……？

小難しいというか、ひたすら単語が羅列してあるだけ？

「お前は魔物やら精霊の好む魔力色をしているようだからな。こいつを使って召喚獣でも使役して身を守るのが安全だろう」

「なんだよこれ。単語帳か何かか？文章意味わかんないけど」

「ああ、それも一種の魔方陣だ。規則的に呪語を書いて一定の効果を発揮するようにする。お望みなら法則とか公式やらいろいろ講義してやるが、聞くか？」

「……いいえ、結構です」

結構分厚い本を改めて見て、その途方もないであろう作業を想像して辟易する。

「ま、お前には一億年かかっても無理だろうな。これは魔女の秘術というヤツを用いているからな」

「ん、そういやエルルカって魔女なんでしょ？魔女と魔術師って何か違うの？」

「ふむ、まあ別にそう大きな違いがあるわけではない。

魔女は魔女の掟というモノを持ちそれを守り続けているってだけだ。

まあ使う魔術の方向性も若干違うが、似たようなことを研究している魔術師もいるしな。

ただし魔女の秘術そのものは掟を守り続けている者でしか使えぬ。だから気がつけば伝承者は私一人になってしまっていた」

「掟？」

「ああ、例えば女であること、処女であること」

「ブフオツ！」

しよ、しよ、しよ、しよ、処女って!!

女の子がそんなこと自分から言うってどうなんだ!

「き、汚いぞ、唾がかかったではないか! あーあ、これで純潔が失われたかも知れぬな、責任取ってくれるのかイズミ?」

妖しく笑いながら身体を密着させてくるエルルカ。

くう、完全にこいつ俺で遊んでやがる。

エルルカはしばらく子猫のようにくっついていたが、急にパツと身体を離れた。

さっきまで暖かかったところが急にヒンヤリして少しだけ淋しい。

エルルカは顔を真っ赤にしている。

自分でやっという何で恥ずかしがっているんだコイツ。こっちの方が恥ずかしくなるわ!

「ま、まあ、モノは試しと言うし召喚術使ってみてはどうだイズミ」

「へ? そんな簡単に使えるの?」

「そりゃあ、勉強したくない貴族のために作った品だぞ。お前みたいなアホでも使える」

ぬおー! このちびっ子は言わせておけば!

しかし、せつかくの魔術を使えるチャンスだ。ここでエルルカの臍

を曲げさせるのは得策ではない。
黙って従っておこう。

「いいか、まず本を開け。ページはどこでもいい。好きなところだ」
言われる通りに適当なページを開く。

「で、霊血を捧げろ」

よしっ、父さん捧げちゃうぞー。……ってどうやるんだ？

「あー、エルルカさん？」

「なんだ、さっさとしろ」

「どうやって捧げるんすか？」

「あ……」

こいつすっかり俺が魔法なんかと関わったことが無いの忘れてやがったな。ドジっ子魔女め。

「あー、そうさな、こうドバっと出す感じではなく、チヨロっとな」

「ふんふん」

「まあ慣れたらなんとかなるぞ、ハハハ……」

「できるかー！！！！」

なんてこった。後ちょっとで夢の魔法使いになれるっていうのにこんな巨大な壁があったなんて。

どこかに教えるのが上手な素敵な人はいないか。

……っていた。

さっきから御者台で黙って座っているイケメン筋肉様がいるじゃないか。

「エルルカ、フィーレさんも霊血の捧げ方わかる？」

「ああ、もちろん。しかしアイツに聞くのか？止めておいた方がいいぞ」

「お前よりマシだよ！　フィーレさん、ちょっといいですか？」

又ツと振り向くツンツン赤髪の青年。

あれ？なんか眼座ってない？

「・・・お話は大体理解できています。覚悟はいいですか泉殿」

「か、覚悟・・・？　いや、俺は魔法使いたいです！だからお願いします！」

「そうですか。覚悟ができているのであればこのフィーレ、心を鬼にしましょう。」

それでは眼を閉じてください」

言われるままに眼を閉じる。つか心を鬼にしなくちゃできないのか？やばい、一体何されるんだ。鼓動が激しくなる。

フィーレさんの手だろうか、おでこにヒンヤリした何かが当てられる。

「失礼します。　剣を持って、槍を立てよ」

ん？今何か言ってる

「ガッ！う、うわ、なんだこれ！？身体が・・・」

「私の霊血を無理やり流し込んだのです。　私の魔力色は太古の炎。少々熱いでしょうが我慢してください」

熱い、なんてもんじゃない。全身がただ痛い。
というかもう痛いんだか痛くないんだがワケがわからなくなっている。

視界は涙のせいかわやけていてエルルカもフィーレさんも見えない。

怖い。

なんだ、これは。

いや、この感覚は知っている。まるで人の記憶を、見ているときのような。

放り込まれた世界はぐるぐると黒い雲が渦巻いている。

これは歴史だ。

フィーレさんの記憶？

いや違う。

大地の見た太古の記憶。

殺し、殺され、汚し、汚される。

哀しみの記憶。

武器を取る若者。

犯される女。

親を失う子供。

たくさん悲劇。どこにでもあるそんな悲劇。

この世界もそんな悲劇に満ち溢れている。どこに行ったって同じ、つまらない世界。

たくさん風景が過ぎ去ってゆく。

その先に、身体中の肉が裂かれ、髪は抜け落ち
のは内臓だろうか。

ああ、今落ちた

汚れてボロボロの一人の人間がいた。

ああ、あれはきつと女の子だ。

俺は何となくそう思った。

最早人とは呼べない姿で真っ直ぐに立っている。

どれだけの悪意を受ければこんなにも傷付くのだろう。
俺は身体を駆け巡る痛みに耐えながら、彼女を見ようと懸命に眼を凝らす。

なあんだ、全然傷ついていないじゃないか。

だって、あんなにも綺麗な笑顔をしてる。

「そろそろ良いのではないか、フィーレ」

「そのようです。それではもう一度失礼します、泉殿。 剣は鞘に、槍は武器庫に」

二人の家族の声が暗い世界に響く。

急激に引っ張られる感覚。しかし出口は狭く少しずつしかソレは流れない。

しかしその少しずつのソレはとて多くて。

あ、これって。さっきエルル力が言ってた靈血の。

視界が戻ってゆく。眼に流れこむ水滴。うわっ、全身汗まみれだ。

頭もガンガンする。これは一気に記憶を見すぎてパンクしているからだろう。

しかし記憶を見た後はいつも不安で押し潰されそうになるのに不思議と心は落ち着いている。

あんなにも悲しくて、暗い世界にいたというのに。

彼女の笑顔がとても綺麗だったから？

「よく耐えました。熱く苦しかったですでしょう、泉殿。感覚はわかりましたか」

フィーレさんの震えた声。って泣いてる！？イケメン筋肉が泣いている！？

余りのショックに俺は全身を駆け巡る痛みを忘れて口をパクパクさせる。

「気にするなイズミ。コイツこんなツラなのに涙もろいんだ、年だる年。」

お前も人のこと言えない年だろうが。まあ、フィーレさんの年は知らんけど。

しかし霊血の出し方は解った。これならイケそうだ。

「……ありがとうフィーレさん。そしてごめんなさい。あなたの記憶を俺、見ちゃったみたいだ。」

フィーレさんはそれを聞いてきよんとしている。

「私の、記憶、ですか？別に気にすることはありませんが……いえ、それは主には是非黙っていて頂きたい。金のこととなると煩いので」

って金？

「おい、イズミ！洗いざらい吐け！今すぐだ！こいつまた勝手に私の財宝を！」

なんだか勝手に二人は勘違いして盛り上がってる。うーん、ま、いつか。

あんな悲しい記憶、見られたなんて言ったらいい気持ちしないよね。知らなくたっていいことはある。

「あー、取り込み中悪いけど、折角感覚掴めたんだ。もう一回挑戦していい？」

「くそっ！この件については後だフィーレ！今日という今日は許さんぞ！」

それじゃイズミ、さっさといくぞ。これが終わったらフィーレの記憶について吐けよ。」

「わかったわかった。考えておくよ。」

「本当にわかったのか貴様？まあよい、じゃあもう一回本を開け。いいか、先ほど覚えた感覚通りに霊血を捧げる。そうしたら受け取られる感覚があるはずだ。」

その後求める召喚獣の姿を思い浮かべる！何、大体で大丈夫だ。

お前に見合うモノが上手くいけば呼びかけに応じるだろう。」

「おっけー」

よし、いくぞ。大丈夫。

眼をしっかりと開き、開いたページを見つめる。

狭い、門。

そこから兵士たちが列をなして勇壮に進んでゆく。

数は少なくとも、それはとても力強く行進してゆく。

それが俺の掴んだ霊血を捧げるイメージ。

兵士たちは目標の場所にたどり着いたらそこで倒れてゆく。

きつとこれが受け取られる感覚。

そして、俺が呼ぶもの。

どうしよう、全然考えてなかったな。

でも、さっきのあの子に、気高くて、優しいあの子に会えたら

幌馬車が凄まじい勢いで揺れる。

手元の本は白く発光し、熱を持つ。

柔らかくて温かい、心地よい微熱。

「おいおい！？フィーレ、なんだこの魔力量は！？」

「わ、わかりません。しかし、泉殿のものではないようです！」

「こいつ、何呼びやがった！フィーレ、戦闘の用意しとけ！場合に
よっちゃそのまま召還するぞ！」

「了解しました！」

フィーレさんの手にはいつのまにか幅広の剣が握られている。

筋肉は剣を持っていてもサマになるなあ。

エルルカは帽子から服まで、果てはその靴まで、全身に青白い魔方
陣を浮かび上がらせている。

全く何やってるんだ、二人共。

こんなにも、この光は優しいというのに。

「名前を、あたしの名前を呼んでください」

頭に響き渡る、少女の声。

凜とした、それでいて柳のように柔らかな、高い声。

聞いたことないはずなのに、俺は彼女がそんな声してるだろうって
知っていた。

そして彼女の名前を俺はもう知っている。

いや、自然に頭に浮かんできたのだ。当たり前のように、まるで最
初からそこにあっただように。

「ラプサー！！」

「ラ、ラプサだと！？な、なななななそんな馬鹿なああ！！
！！」

エルルカの間抜けな声が響く。

彼女の名前を読んだ瞬間、より一層本は輝いて、思わず俺は眼を瞑

った。

次第に光は収まり、本が帯びていた熱も大気に逃げてゆく。

俺が眼を開けると、そこにはあの少女がいた。

黒く艶やかな髪は肩で揃えられ、緑色の瞳は宝石のよう。

フィーレさんのような褐色の肌は、上等の絹のように滑らか。

白地に青い水仙のような花が浮かぶ華やかな浴衣のような服は、とても彼女に似合っている。

「綺麗だ・・・」

そんなこと俺はぼけっと呟いてしまっていて。

「キヤー！そんなこといきなり言うなんて、ご主人様、ダイタン！」

彼女はそんな俺に優しく微笑むのだーって。あれ？

あ、結構、軽いノリなんすね、ラブサちゃん・・・。

この日、俺は、異世界の家族ができて、一人の女の子と出会った。

少年は少女と出会う（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

ここまでの話で酷いとこ一気に手直ししました。

手直ししても酷いのはご愛嬌ということにしてあげてください。

改めて見ると自分の作った設定を忘れてたり結構酷い・・・。

性格的にまた不満が溜まって手直しすると思いますがご了承ください。
い。

城塞將軍と女王の懐刀

「女王の犬はどうしている？」

「街道を走るエルルカ」フィンの馬車の目撃情報が幾つも拳がつているのにも関わらず、まだ彼女らを見つけていない、とのことだ」

「・・・見え透いた時間稼ぎだ。くだらん。女王は何も言っていないのか」

「女王はリラ」メイストを気に入っていますからな。見て見ぬふりをしているのかと」

アレほどの大規模な界魔術行使を情によって見逃すつもりなのか。なんと情けない。

深緑の布地に金の刺繍が入った貴族服を来た壮年の男はこめかみを押さえる。

「全くもってくだらん。愚かな女共だ。それでは国軍への下知も無いだろう。目撃情報の詳細を申せ」

「はい、エルルカが目をかけている村からの密告では、彼女の馬車は街道を南に進んでいるようです」

「ふん、あのお人好しの魔女のことだ、まさか息のかかった者から密告されているなどとは思えない」

「恐らくは。しかし、エルルカは赤の国に亡命するつもりなのでしようか？あの街道を通ると我が王都の通過は確実ですが・・・」

青白い顔の男は媚びた顔で、正面の男を窺う。

「いや、それは無いな。あの女はそもそも五大国を嫌っている。その世話にわざわざなりには行かんだらう。タイミングは知らんが必ず何処かで動きがあるはずだ。」

目的地はギルドの権力が強い紫の国か、ヤツの故郷の原始の大森林か。どちらにせよ本来は北に行きたいはずだ」

貴族服の男は本当につまらなさそうに龍を模したペンダントを触りながら、目の前の男を一瞥して言った。

「悪い癖だ、レドウス」

「申し訳ありません、レイアル卿。しかし本当に卿のご慧眼には驚かされてばかりです」

「何を言う、本当は貴様も同じ予想を立てていたのであろう？」

いいか、もう一度言うがこの私を試してくれるな。貴様の首など私にとつては羽虫を潰すのと変わらんぞ」

「おお、それは怖い。気をつけましょう。 それでは再び女王の近辺を探って参ります」

「ああ、任せる。さっさと消えろ」

「はい。 ああ、忘れるところでした。 魔女の馬車には彼女の使い魔以外に異国の黒髪の少年がいたそうです」

「異国の少年、か。 ふむ。 まあ良い、さっさと消えろ」

「・・・恐らくはそれが界魔術に関わっている者かと。 殺すよう刺客を仕向けましょうか？」

「余計な真似をするな。 貴様に期待しているのは女王の情報を持つてくること、そののみだ」

。そして、この国に害をなすものを殺すのは私の役目だ。 何度も言わせるな。 下がれ」

「・・・はい。 それでは失礼します」

そそくさと酷薄そうな笑みを浮かべながら執務室から出ていく男。

汚らしい豚め。

舌打ちをしながら、グスタフ・レイアルはそれを苦々しく見守った。彼を女王に対する間諜として雇ったのは他でもないグスタフではあるが、何食わぬ顔で表の主、すなわち女王を裏切り続けている男を見ていると吐き気がした。

私も、同じ穴の貉か。

自嘲して苦笑する。金で主を鞍替えする男、主を殺そうとする男。性質が悪いのはどう考えても後者だ。首を力なく振る。常時の彼を知っている者ならば彼の弱気な姿に驚くことだろう。

気を取り直すように立ち上がるとグスタフは練兵場に行くため馬を取りに行く。

彼は国軍の元帥に任命されてから毎日欠かさず練兵の様子を視察し続けている。

大陸ほぼ中央に位置し、周囲を赤、黄、青という大国に囲まれた白の国は戦が多い。

故に常時徴兵を行っており、練兵場の規模も他国に比べると大きいと言えるだろう。

練兵場にいる者はほとんどが農民、もしくは没落した貴族。

国のため、家族のため、名誉のため、金のため。

その感情は様々なものではあるだろうが、どんな事情や目的があるうと国のために血を流す者達であることに変わりはない。

そんな彼らと汗をかくのは国軍元帥として、名門たるレイアル家の家長として当然だと彼は信じている。

剛直な彼の気性を畏れる者は多いが、皆彼の愛国心を知っているため彼への信望は非常に篤い。

人呼んで城塞將軍。

数多の防衛戦を経て未だ敗北を知らぬ、守勢の名将レイアル卿。

かつて国軍に入る際、グスタフは父に尋ねられた。

「グスタフ、お前はなぜ軍などに入るのか。我らが領地は広く税収も多い。何も軍に入らずとも公に尽くす方法はあるだろうに」

「父上、私の夢は、歴史ある女王家と無辜の民を守り、我がレイアル家と同じように誇りある貴族と共に戦い、酒を飲み、明日を語ることにあります。」

父上は以前から、私の夢を尊重したいと仰っていたではありませんか。ならばどうか笑顔でお見送りくださいませぬか」

そう晴れやかに言う息子を見て、父はその人生で最も穏やかな笑みを浮かべ息子を見送った。

レイアル家の家長の証たる竜のペンダントを息子に託して。

・・・しかし外敵から国を守り続けた男はいつしかその若き日の夢を失っていた。

気がついたときには、もう遅すぎたのだ。

女王という慣習をただ蒙昧に続けることにしか関心のない王家。

国政をただ権力の小競り合いにしか用いない貴族。

若き日の夢は、いつの間にか埃に塗れ、数多の栄光も彼にとっては何の意味のないものとなっていた。

女王のために死んでいった自分より若き騎士たち。

領地から徴兵され、産まれたばかりの幼子を残し散っていた若き農夫たち。

彼の鉄の双眸はその全てを焼き付けた。

そしてその竜の心は揺れ続けた。

一体この国に、王家に、貴族に何の価値があると言うのだ。

やっっていることはそこらの賊となんら変わらん。

殺し、奪い続けるだけ。そしてその犠牲になるのはいつも力なき民だ。

「・・・ならばこそ、私は女王を弑し、貴族共を駆逐し、政を民に渡さねばならん。この身が朽ちる前に」

ズン。

腹の奥底に響き渡るような魔力の蠢き。

魔力の不得手なグスタフでも気がつくほどの界血の移動　すなわち界魔術の行使の痕跡。

「な、なんだ、今のは！おい！おい誰かいるか！」

「はっ、ここに！」

馬舎に常駐している兵士が声を上げる。

「さつさと馬を出せ！それと今日の視察が中止になったことを秘書官に伝えておけ！私は王城に向かう！」

兵士から手綱を奪い取るや否や、グスタフを駆け始めた。王城まで飛ばしても半刻はかかる。

「民の血を喰んでその生をなす貴様らは、これすらも見て見ぬ振りをするつもりか？」

忌々しげに、遠くに見える王城の純白の塔を睨み、ギリと奥歯が削れるほどに噛み締めた。

「入りなさい」

ギイ、と音を立てて女王の間の巨大な扉が開かれる。

白の国の王城に相応しい、絢爛な白い大理石作りの大部屋。

水晶細工の蝋燭立てが王座に向かって並んでいる。

その間を私は真っ直ぐ突き進む。

「失礼致します。教会騎士団団長リラ・メイスト、只今参上仕りました」

「忠勤ご苦労です。リラ」

玉座には柔らかく微笑む白の君。彼女が私の忠誠を誓うお方。御年24歳、全てを国に捧げた女性。

「定時の報告に参りました。

王宮魔術師殿から報告のあった界魔術を行使したと思われる者ですが」

「ふふ、見つからないのでしょうか。それならば仕方ありませんね」

「・・・はっ。恐れながら」

「そのまま搜索を続けなさい。この件はあなた方騎士団に一任します。国軍のことは何も心配いりません。そうそう、あなたの補佐は随分と議会派に好かれているようですね」

「はっ。私には過ぎた部下です」

はうん！ヒュームが褒められてる！！嬉しいなあ・・・。

にしてもさっきヒュームが書いていた書簡は議会対策のものだったのか。

確かに私の権限を使えば、騎士団を押し留めるのは難しいことではない。

自分で言うのもなんだが私は陛下からの信頼も比較的篤い方だと思うし、いざとなれば自分の首を対価に大体の事件を揉み消せるだろう。

しかし議会派の連中には私の権力は通用しない。

今回の界魔術行使も、実行犯が見つからなければ奴らは王宮魔術師にでもイチャモンをつける気でもいるのだろう。

王宮魔術師は実力はあることは間違いないのに、総数も所属する個人についてもほとんど不明ときている。あらぬ疑惑をかけるのには最高の素材だ。

おまけに界魔術の関係者を私の師であり、国賓扱いのエルルカ様が握っている。

この事件に絡みたくて絡みたくてたまらないはずだ。

一挙に教会派の権力を落とす大きな好機なのだから。

そんな飢えた狼のような議会派をヒュームがどうやって押し留めているかは気になるけれど、ね。

いい男にはヒミツの1つや2つ必要だもんね。

それに私そういうの聞いたら人に教えたくない性質だから聞かない方がいいのかも知れない。

で、でも結婚したらいいよね。夫婦はヒミツを共有するものなんだしっ！

私が界魔術関連以外の報告事案を伝えていると、不意に後ろが騒がしくなった。

どうやら面談中だ、だの緊急の案件だ、などと言って近衛兵が押し問答しているらしい。

「何ですか、騒々しい。要件ならばそこで言いなさい。騎士団長は

私の腹心。気にすることはありません」

「はっ！ご面談中に大変申し訳ありません。国軍元帥グスタフ・レイアル卿が火急にお耳に入りたいことがあると、門の外までお越しになっております」

「レイアル卿が？・・・どうしましょう、レドウス」

「げ、あいついたのか。」

玉座の影からぬらりと出てくる青白い顔の男。そいつを私は知っている。

王宮魔術師の中でも特に陛下の信任篤き男、レドウス。

姓が無いのは果たして奴隷階級出身であるからなのか、それとも深い事情があるのかは私には与り知らぬところではあるが少なくとも、陰湿な二オイの漂うコイツを私は好きではない。

コイツはそれがどのようなものかはわからぬが常に自身に何らかの魔術をかけている。

それを陛下に訴えたこともある。しかし陛下が言うには酷い火傷の痕を隠すための魔術であり、他の王宮魔術師も知っていることだという。

使い古された嘘だ。

陛下を疑う訳ではないが、私はどうにそれを信じていることができない。といつても高名なエルルカ様に師事したのに強化魔術一辺倒の私が王宮魔術師の意見に不満を述べることもできないので、今はこいつの動向に注意をなるべく払うようにしている。

まあ陛下に変な魔術がかけられている様子もないし、無駄な心配だとは思いたいのだけれど。

できることならば人を疑うようなことはしたくない。

人の秘密を曝け出すような役職にはついていないけれど、ヒュームが言うように私たちは騎士なのだ。

誰よりも優しく強く。公に尽くす者。
ま、教会騎士は法律に尽くす者なだけどね。

「火急の報告だと言っている国軍元帥を、待たせたとすれば議会派を無闇に刺激することになります。ここは騎士団長殿に一時退席をお願いして、レイアル卿を招きいれるべきかと」

確かに、議会派を今刺激するのはまずい。

恐らくは昨晚のことについて動かない私たちに痺れを切らし、陛下に掛け合いにきたのだろう。

「ふむ。リラはどう思いますか」

「はい、私もレドウス殿と同意見です、報告事案も全て終わりましたし」

「そうですか。わかりました。ならば、騎士団長、そなたの変わらぬ忠義に感謝します」

「はつ。勿体なきお言葉。それでは失礼致します」

自らの胸にそつと手を置く陛下。

私の心にあなたの忠誠は、届いています
何百年と連綿と続いた退室の儀礼。

私は深く頭を一度下げ、レドウスに目礼してから下がる。

そいつは血色悪そうな顔を神妙なものにしながら慇懃に頭を下げた。

ん？なんだアレは。

レドウスの左耳には小さなピアスが刺さっている。

ただの装飾品と言えばそうだが、随分と見たことのない色をした金属でできている。

赤茶？いや、そういう色というよりは・・・そうだ、あれは錆びて

いるんだ。

何で錆びたピアスなんてしているんだアイツ。

うつむ、気になる、気になるけれど今質問するわけにもいかないし。

近衛により扉は放たれていた。結局疑問をそのままに私は陛下の執務室を出た。

甲冑の中は汗ばんでいるが、頬に当たる風が心地よい。時刻はもう夕刻だ。だいぶ涼しくなっている。

どこかで休んで行こうかな。今戻っても取り立ててする仕事もない。

エルルカ様の件も今は落ち着いている。昨日も余り寝ていないし、ちよつとくらいなら、いいかな。

私は少し早い夕食を取るために一度帰宅することにした。

しかし、このとき私はとんでもない大失敗を犯していたのだった。

陛下の執務室は王宮魔術師による何十もの結界が貼られていて、外界の魔力の捕捉が全くできないということ。そんなことをすっかり忘れていたのだ。

私はその日の夕刻、陛下との面談中に、昨晚など比ではない巨大な界魔術行使が捕捉されたことを知ったのは、夜深くなつてからだった。

城塞將軍と女王の懐刀（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2770ba/>

君の物語

2012年1月10日00時49分発行